
TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム

TRAIN TRAIN TRAIN

開催レポート

聴覚に障害のあるアスリートを対象とした国際総合スポーツ大会デフリンピックが東京で初めて開催された令和7年11月、同大会の開催に合わせ、東京2020パラリンピック開会式のレガシーを受け継ぐ新作公演「TRAIN TRAIN TRAIN」が東京芸術劇場プレイハウスで開催されました。

本レポートは、「視覚だけでも、聴覚だけでも、その両方を使っても楽しめる」ダンス作品として、演者と客席双方のアクセシビリティの工夫を施し、誰もが楽しめる舞台作品として新たな挑戦に取り組んだ本公演について、特にアクセシビリティの観点から演者、観客の声を交えて振り返ります。(公演画像 撮影：宮川舞子)

—ストーリー—

詩人が不思議な列車「ムジカ」と出会うことから物語が始まります。列車の名は「MUSIC＝音楽」の語源であるラテン語の「musica」という言葉から名付けられました。「musica」はるか昔、音楽だけではなく、舞や詩など、広く豊かな芸術を内包した言葉。この舞台では、語源の「musica」を目指し、豊かな芸術の世界を旅します。詩人は旅する中で、多様な存在と出会いながら、“まだ見ぬ自分”や“多様な他者”を見つけていきます。それは、誰の中にもある“表現の列車”を走らせる、想像と創造の旅です。

～パラリンピックの絆～多様な個性を持つキャストと豪華制作陣

ダンサー・演出家の森山開次を筆頭に、東京2020パラリンピック大会のメンバーに新たなメンバーを加え多様なキャスト・スタッフが集い実現した本公演は、和合由依、岡山天音、坂本美雨、KAZUKI、はるな愛ほか、ろう者の俳優・ダンサー、義足のダンサー、一輪車パフォーマー、車椅子で即興表現を得意とするパフォーマーなど、多様な個性・背景を持つ23名の表現者が出演、それぞれの個性や経験を活かした身体表現により、ひとつの物語を紡ぎ出しました。

また演出・振付：森山開次、音楽：蓮沼執太、テキスト：三浦直之ら豪華クリエイター陣が、イマジネーション溢れる世界を創り出しました。



作品世界に溶け込む手話

手話は、聴者の話すセリフを客席のろう者に届けるための“通訳”としてではなく、コトバを表現する手法のひとつとして舞台上に並び立ちました。

補助的に用いられる手話通訳とは一線を画す本作における手話表現は、手話ができる人だけでなく手話ができない人も違和感を抱かないほど作品世界に溶け込んでいました。

【スチームダンサー役 梶本瑞希】

舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』に関わることができて、本当に光栄でした。耳が聴こえない自分にとって、台詞のタイミングを合わせることや、すべてのお客様に情報を届ける方法を探すことは大きな壁でしたが、多くの方々に支えられ、挑戦し続けることができました。聴こえないからこそ出会えた人や物語があり、それが自分の力になっています。この経験を糧に、ダンスだけでなく、舞台も映画もドラマも、演技の世界にももっと飛び込みたい。これからも表現者として、一つひとつの作品に全力で向き合っていきます。



コトバを表現する手法として「手話」を話すスチームダンサー役 梶本瑞希（左から3番目）

音楽とは何かを問う

本公演では作品全体が「音楽とは何か」という問いにも挑戦しており、その答えの一つとして、音のない世界で生きるろう者にとっての「おんがく（サインミュージック）」を奏でる場面もありました。ろう者の体から生み出されるリズムや感情が、視覚的に表現されました。

【ベン役 KAZUKI】

多様な当事者がムジカに乗り旅をしながら対等な立場に関わり、字幕や音の可視化、手話 通訳などの丁寧なアクセシビリティは、ろう者にとって想像力を広げる大切な環境でした。舞台や芸術を「観る側」と「表現する側」としても関わるきっかけとなりました。次の一步につながっていくことを願っています。



サインミュージックで聴者と並び立つベン役 KAZUKI (左から1番目)

～パラレガシーを継承した「誰もが楽しめる舞台」への挑戦

本作のアクセシビリティディレクター栗栖良依は東京 2020 パラリンピック開会式のステージアドバイザーを務め、同開会式で障害の有無にかかわらず楽しめるパフォーマンスを実現、そのレガシーを受け継いだ本作ではそのコンセプトをさらに発展させました。

本公演における観客に向けたアクセシビリティは、「理解するためのサポート」ではなく、「想像することを楽しむための工夫」を大切に、見る、聞く、それぞれの感覚から物語を味わえるよう、多彩なクリエイターと共に、初めから多様な観客を想定して創作に臨みました。

音声ガイド・字幕

劇作家・三浦直之は、舞台上のセリフと音声ガイドの両方を手がけました。音声ガイドは視覚障害者を対象として制作される従来の音声描写ではなく、ストーリーテリングの形をとることで見える人も見えない人も、それぞれの感覚で物語を想像しながら、同じ時間と体験を共有できる、新たな鑑賞スタイルを目指しました。

また、ポータブル字幕には、音声ガイドのテキストに、話者や音の解説を加えた情報を配信しました。音声ガイド・字幕は、個人のスマートフォン等の端末に配信するシステムを採用し、障害の有無にかかわらず、自らが希望する観劇スタイルを自身の座席から手軽に利用できるように設計しました。



物語の想像を助ける音声ガイド・字幕はスマートフォンや貸出用タブレットなどで誰もが気軽に利用できるよう設計

(c) Yusuke Nakazawa

乗車ガイド(デジタルパンフレット)

当日に配布していた紙のパンフレットに代わり、本作では上演前にオンラインで作品情報を公開しました。障害の有無にかかわらず、誰もが作品をより深く楽しむためのツールとして、舞台であるSL ムジカにちなみ、これらの案内を「乗車ガイド」としています。

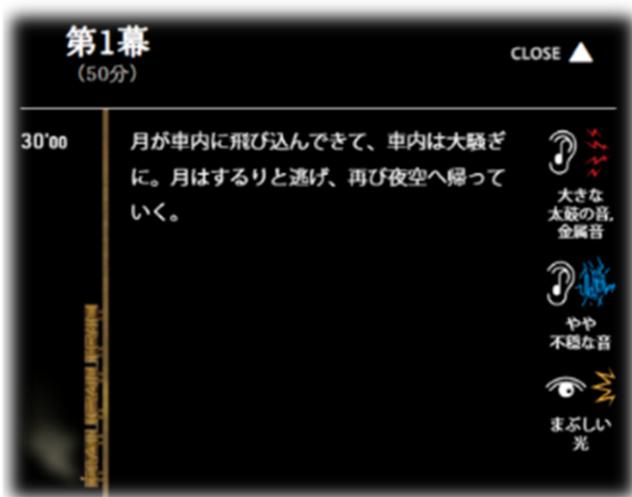
(乗車ガイド | 舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』 | 東京芸術劇場公式)

大きな音や光が苦手な人への配慮として、物語の展開にあわせた音や光の演出情報をストーリー・テーブルとして観劇前に明示し、誰でも安心して足を運んでいただけるような環境づくりにも取り組みました。

また、音声ガイドで楽しむ方のための登場人物と衣装解説、美術・音楽・テキストのアクセシビリティの視点を活かした創作の工夫やインタビューなど多岐に渡るメニューを用意し、鑑賞前の期待感や想像力を高めました。



誰もが作品をより深く楽しむための乗車ガイドを公演前に HP で事前公開



ストーリーテーブルでは大きな音や発光のタイミングを明示 (乗車ガイドより)

～デフリンピックのレガシーとして

本公演は、デフリンピックに向けた文化プログラムとして、クリエイティビティとアクセシビリティの二つの視点で試行錯誤を重ねてきました。舞台上では多様な個性が躍動し、客席側でも誰もが楽しめる環境を整え、観客に新たな鑑賞体験を提供しました。

公演を見た方からは

「演者さんに障害を持った方々もいるということを知らずに観たら、気づかずにただただ素晴らしい舞台だったと思うだろうな、というくらい、みなさんが素晴らしいパフォーマーとして輝いていた」

「舞台と鑑賞者で分断されることなく、まるで自分も舞台の世界に入り込んだかのような感覚になる時があった。他の舞台では見たことのない、誰もが見やすい工夫がたくさん散りばめられていて、興味深かった」

等の意見が寄せられました。

本公演の取組がモデルとなり、誰もが芸術文化を楽しめるアクセシビリティの取組がより広がっていくことが期待されます。

